

離散最適化基礎論 第7回

多面体の基礎

高橋里司

stakahashi@uec.ac.jp

2018年12月6日(金)



当面のスケジュール（予定）

B. コルテ, J. フィーゲン：組合せ最適化, シュプリンガー
(2009) の 3, 4 章を解説

- 1 多面体の基礎 (担当：高橋, 12/7)
- 2 弱理想グラフ定理 (2)：多面体的手法 (担当：村松, 12/14)
- 3 楕円体法 (1)：基礎, アルゴリズム (担当：村松, 12/21)
- 4 楕円体法 (2)：応用 (担当：高橋, 1/11)

今日のスライドは, http://optlab.org/?page_id=682 で公開する.

線形計画法 (復習)

線形計画問題 (最大化)

インスタンス： 行列 $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$ と2つの列ベクトル $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^m$ と $\mathbf{c} \in \mathbb{R}^n$.

- タスク：
- 1 $A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}$ を満たす列ベクトル $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ が存在するかどうかを判定する。
 - 2 存在するならば，任意の $\alpha \in \mathbb{R}$ に対して， $A\mathbf{x}_\alpha \leq \mathbf{b}$ かつ $\mathbf{c}^T \mathbf{x}_\alpha > \alpha$ となる $\mathbf{x}_\alpha \in \mathbb{R}^n$ が存在するかどうかを判定する。
 - 3 そのような \mathbf{x}_α が存在しないならば， $A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}$ を満たすベクトル $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ のうちで， $\mathbf{c}^T \mathbf{x}$ を最大にするような $\mathbf{x}^* \in \mathbb{R}^n$ を求める。

線形計画問題 (LP) を $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ と書くことにする。

線形計画法 (復習)

LP $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\}$ に対して, $\mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}$ を満たす \mathbf{x} を LP の実行可能解といい, $P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\}$ を実行可能集合とする.

$\mathbf{x}^* \in P$ が LP の最適解 \Leftrightarrow 任意の $\mathbf{x} \in P$ に対して, $\mathbf{c}^T \mathbf{x}^* \geq \mathbf{c}^T \mathbf{x}$.

LP が最適解を持たないときは, 次の2つのケースのいずれかになる.

- 1 $P = \emptyset$ で実行不可能である場合.
- 2 任意の $\alpha \in \mathbb{R}$ に対しても $\mathbf{c}^T \mathbf{x} > \alpha$ となるような $\mathbf{x} \in P$ が存在する非有界である場合.

線形計画法

LPが実行不可能でも、非有界でもないときは、次のように最適解が存在する。

命題

$P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\} \neq \emptyset$ と $\mathbf{c} \in \mathbb{R}^n$ に対して、
 $\sup\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\} < \infty$ であるとする。そこで、
 $\delta = \sup\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ とする。このとき、 $\mathbf{c}^T \mathbf{z} = \delta$ を満たすベクトル $\mathbf{z} \in P$ が存在する。

これから、 $\sup\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ ではなく、 $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ を用いても良いことになる。

多面体の基礎

組合せ最適化問題は、多くがLPで定式化できる（前回までの授業より）。

LPの実行可能領域 $P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\}$ は

$$P = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : \begin{array}{l} \mathbf{a}_1^T \mathbf{x} \leq b_1 \\ \mathbf{a}_2^T \mathbf{x} \leq b_2 \\ \vdots \\ \mathbf{a}_m^T \mathbf{x} \leq b_m \end{array} \right\}, \quad A = \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1^T \\ \mathbf{a}_2^T \\ \vdots \\ \mathbf{a}_m^T \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_j \in \mathbb{R}^n$$

と表され、有限個の半空間の共通集合となる。

多面体の基礎

定義 (多面体)

行列 $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$ とベクトル $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^m$ を用いて,
 $P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ と書ける集合 P を多面体 (**Polyhedron**)
という. P が有界であれば, P を有界多面体 (**polytope**) という.

行列 A のランクを $\text{rank}(A)$ と表す. 空でない集合 $X \subseteq \mathbb{R}^n$ に対して,

$$n - \max\{\text{rank}(A) : A \in \mathbb{R}^{n \times n}, \forall \mathbf{x}, \mathbf{y} \in X, A\mathbf{x} = A\mathbf{y}\}$$

を X の次元といい, $\dim X$ と書く. 多面体 $P \subseteq \mathbb{R}^n$ は, $\dim P = n$ のとき, 全次元 (**full-dimensional**) であるという.

多面体の基礎

定義

$P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\}$ を空でない多面体とする.

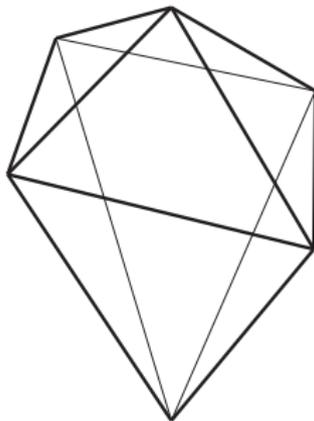
$\delta = \max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ が有限となる非零ベクトル $\mathbf{c} \in \mathbb{R}^n$ に対して, $\{\mathbf{x} : \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \delta\}$ は P の支持超平面 (**supporting hyperplane**) と呼ばれる.

定義

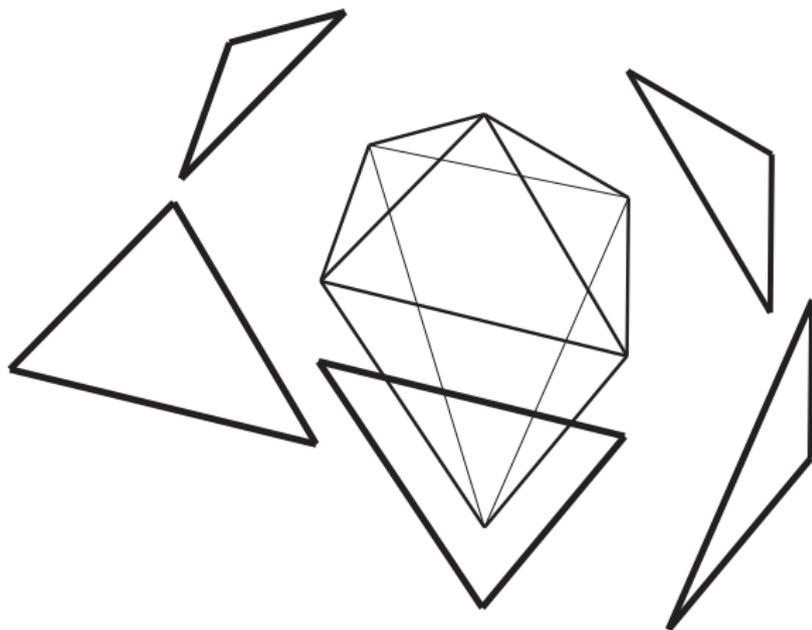
P の面 (**face**) は, P 自身, あるいは, P の支持超平面と P の共通部分として定義される.

$\{\mathbf{x}\}$ が面となる点 \mathbf{x} は P の頂点と呼ばれ, 系 $\mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}$ の基底解と呼ばれる.

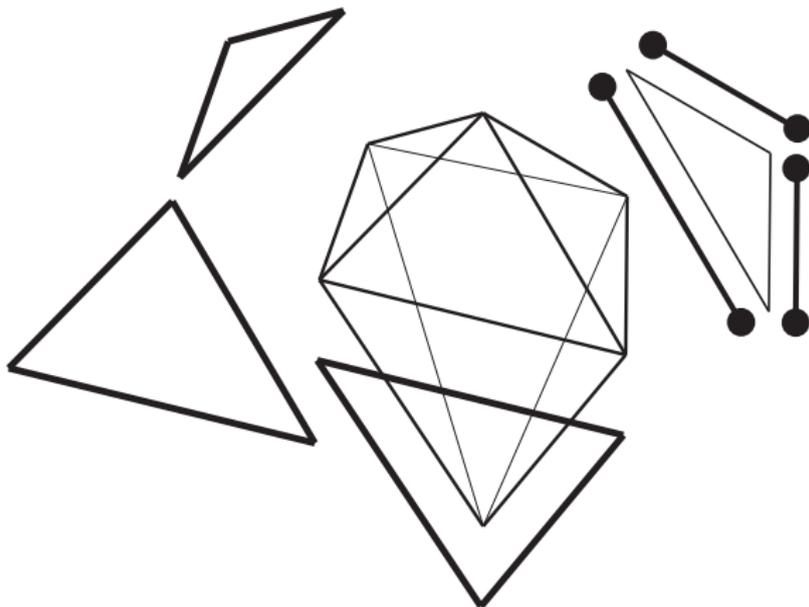
面の例



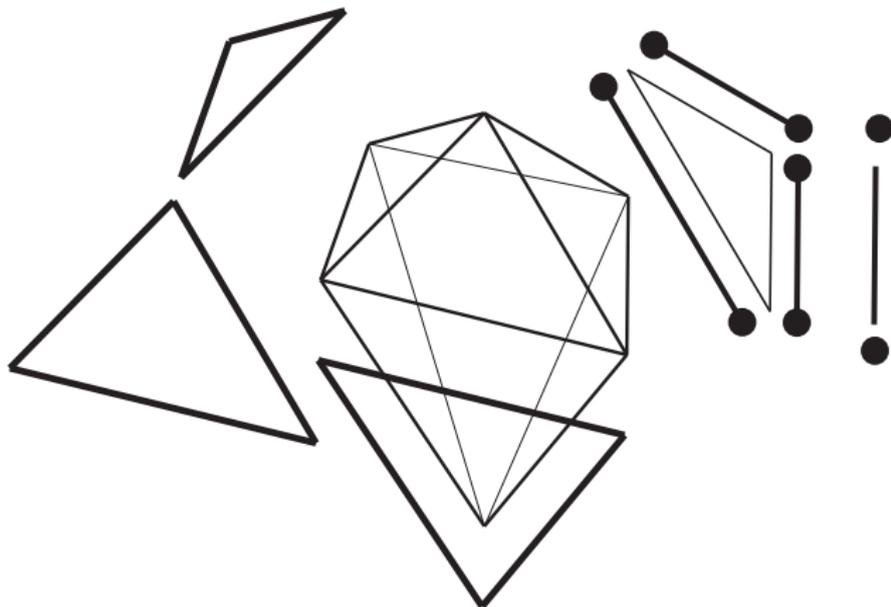
面の例



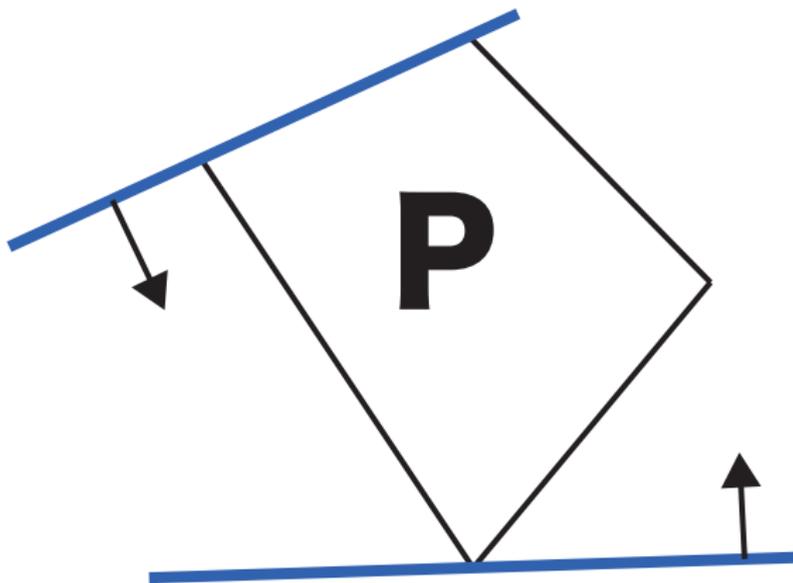
面の例



面の例



支持超平面の例



多面体の基礎

命題 (多面体の特徴付け)

$P = \{\mathbf{x} : \mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}\}$ を多面体とし, $F \subseteq P$ とする. このとき, 以下の (a)-(c) は互いに等価である.

(a) F は P の面である.

(b) $\delta = \max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ が有限で,
 $F = \{\mathbf{x} \in P : \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \delta\}$ となるようなベクトル \mathbf{c} が存在する.

(c) $F \neq \emptyset$ であり, $\mathbf{Ax} \leq \mathbf{b}$ のある部分系 $\mathbf{A}'\mathbf{x} \leq \mathbf{b}'$ を用いて, $F = \{\mathbf{x} \in P : \mathbf{A}'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\}$ と書ける.

多面体の基礎

(a) \Leftrightarrow (b) は面の定義より明らか.

Proof.

(b) \Rightarrow (c) を示す. $F = \{\mathbf{x} : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\} = P \cap \{\mathbf{x} : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\} \neq \emptyset$ とする.

A の行ベクトルの和を \mathbf{c} とし, \mathbf{b}' の成分和を δ とする.

A , \mathbf{b} の成分はいずれも $\pm\infty$ ではないものとしているので, 明らかに δ は有限であり, 任意の $\mathbf{x} \in F$ で $\mathbf{c}^T \mathbf{x} = \delta$ である.

さらに, $P = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ から, 任意の $\mathbf{x} \in P$ で $A'\mathbf{x} \leq \mathbf{b}'$ であるので, $\mathbf{c}^T \mathbf{x} \leq \delta$ となる. 一方, 任意の $\mathbf{x} \in P \setminus F$ に対して,

$A'\mathbf{x} \neq \mathbf{b}'$ であるので, $\mathbf{c}^T \mathbf{x} \neq \delta$ となる. 従って,

$F = \{\mathbf{x} \in P : \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \delta\}$ となる. □

(c) \Rightarrow (b) は少し難しい.

多面体の基礎

重要な系

系

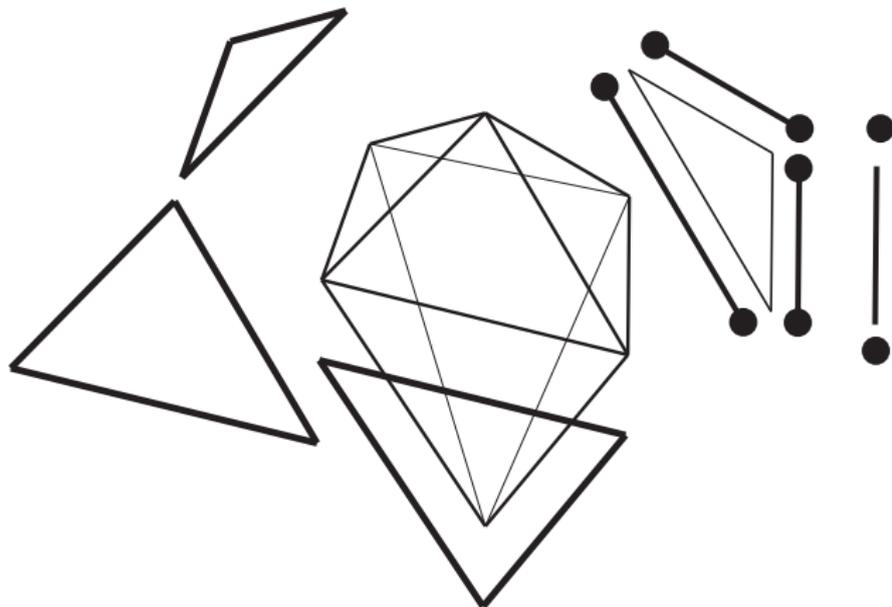
空でない多面体 P とベクトル \mathbf{c} に対して、 $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ が有界ならば、最大値を達成する点の集合は、 P の面の 1 つに一致する。

系

F を多面体 P の面とする。すると F も多面体である。さらに、集合 $F' \subseteq F$ に対して、 F' が P の面であることと、 F' が F の面であることは等価である。

2つの面 A, B に対して定義される“ A は B の面である”という関係は推移的である。

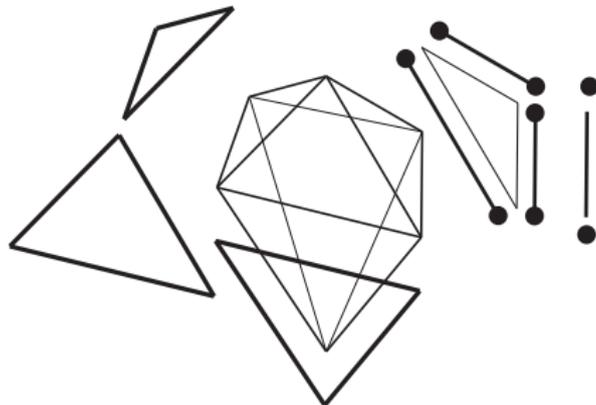
多面体の基礎



多面体の基礎 -重要な面 1-

定義

多面体 P において P と異なる極大な面を P のファセット (facet) という。不等式 $\mathbf{c}^T \mathbf{x} \leq \delta$ は、すべての $\mathbf{x} \in P$ で $\mathbf{c}^T \mathbf{x} \leq \delta$ でありかつ $\{\mathbf{x} \in P : \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \delta\}$ が P のファセットであるとき、 P のファセット定義 (facet-defining) 不等式と呼ばれる。



多面体の基礎 -重要な面 2- I

命題 (Hoffman and Kruskal(1956))

$P = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ を多面体とする. 空でない部分集合 $F \subseteq P$ に対して, F が P の極小な面であるための必要十分条件は, $A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}$ のある部分系 $A'\mathbf{x} \leq \mathbf{b}'$ を用いて $F = \{\mathbf{x} : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\}$ と書けることである.

多面体の基礎 - 重要な面 2 - II

Proof.

(\Rightarrow)

F を P の極小な面とする。 F は面より、 $F = \{\mathbf{x} \in P : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\}$ となるような、 $A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}$ の部分系 $A'\mathbf{x} \leq \mathbf{b}'$ として、極大な部分系を選ぶことにする。 $A''\mathbf{x} \leq \mathbf{b}''$ を

$F = \{\mathbf{x} \in P : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}', A''\mathbf{x} \leq \mathbf{b}''\}$ となる極小な部分系とする。この時、 $A''\mathbf{x} \leq \mathbf{b}''$ は不等式を含まないことが言える。

そうではないと仮定して、 $\mathbf{a}''^T \mathbf{x} \leq \beta''$ を1つの不等式とする。すると、この不等式は F を記述する冗長でない不等式になり、

$$F' = \{\mathbf{x} : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}', A''\mathbf{x} \leq \mathbf{b}'', \mathbf{a}''^T \mathbf{x} = \beta''\}$$

は F のファセットになる。このとき、 F' は P の面になり、 F が極小な面であることに反する。従って、 $F = \{\mathbf{x} : A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'\}$ となる。



多面体の基礎

- LP の最適解は、 $P = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ の面で達成されるので、先の命題より、 $A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}$ の各極小な部分系の方程式 $A'\mathbf{x} = \mathbf{b}'$ を解くことで、有限時間で求めることができる。
- 効率的に求めるための単体法については、学部授業の数値計画法で述べられているので、スキップ。
- 単体法が多項式時間アルゴリズムではない例を紹介する。

多面錐

定義

- 集合 $C \in \mathbb{R}^n$ は、任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in C$ と任意の $\lambda, \mu \geq 0$ に対して、 $\lambda\mathbf{x} + \mu\mathbf{y} \in C$ であるとき、錐 (cone) であると呼ばれる。
- 錐 C の要素 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k$ は任意の $\mathbf{x} \in C$ に対して、ある数 $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_k \geq 0$ を用いて、

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^k \lambda_i \mathbf{x}_i$$

と表せるとき、 C を生成するという。

- C が有限個のベクトルで生成されるとき、その錐は有限生成であるという。
- $C = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq 0\}$ と書けるとき、 C を多面錐という。

多面錐

Lemma (Minkowski(1896))

多面錐 $C = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq 0\}$ は, $\binom{A}{I}$ の n 個の線型独立な行ベクトルからなるある行列 M とある単位ベクトル \mathbf{e}_j に対して $\mathbf{b}' = \pm \mathbf{e}_j$ となるベクトル \mathbf{b}' を用いて $M\mathbf{y} = \mathbf{b}'$ と書ける方程式の解 $\mathbf{y}_{\mathbf{b}'}$ の集合の部分集合で生成できる.

多面錐が有限生成であることの証拠

Klee-Minty の問題

Klee-Minty の問題

$$\text{最大化} \quad \sum_{j=1}^n 10^{n-j} x_j$$

$$\text{条件} \quad 2 \sum_{j=1}^{i-1} 10^{i-j} x_j + x_i \leq 100^{i-1} \quad 1 \leq i \leq n$$

$$x_j \geq 0 \quad j = 1, \dots, n$$

$n = 3$ の例

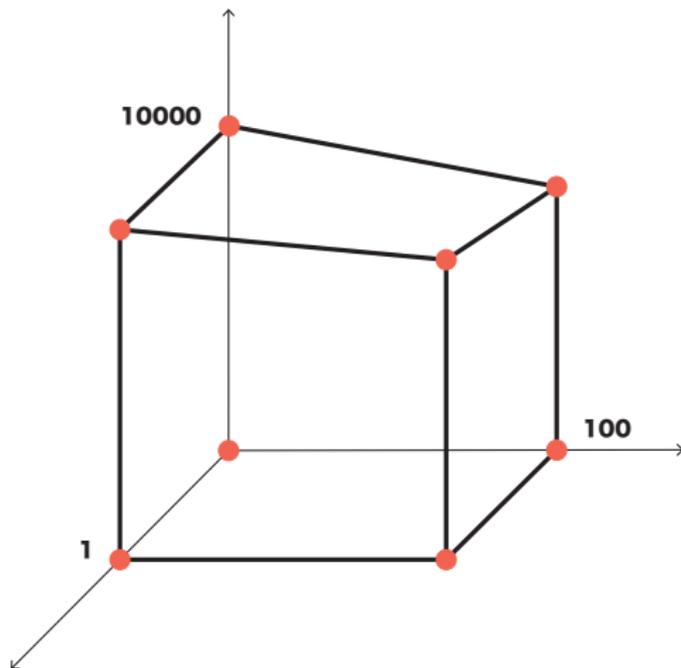
$$\text{最大化} \quad 100x_1 + 10x_2 + x_3$$

$$\text{条件} \quad x_i \leq 1$$

$$20x_1 + x_2 \leq 100$$

$$200x_1 + 20x_2 + x_3 \leq 10000$$

$$x_1, x_2, x_3 \geq 0$$



- 変数 n , 制約数 $2n$ の LP で Bland のピボットルールを用いる単体法が 2^n 回の反復を必要とする.
- 単体法が多項式時間アルゴリズムとなるようなピボットルールが存在するかは未知

有界多面体

有界多面体は有限個の点の凸包に一致することを示す。

定義

- $X \subseteq \mathbb{R}^n$ は、すべての $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in X$ と $\lambda \in [0, 1]$ に対して、 $\lambda \mathbf{x} + (1 - \lambda) \mathbf{y} \in X$ であるとき、凸であると呼ぶ。
- ベクトル $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k \in \mathbb{R}^n$ と $\sum_{i=1}^k \lambda_i = 1$ を満たす $\lambda_1, \dots, \lambda_k \geq 0$ に対して、

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^k \lambda_i \mathbf{x}_i$$

を $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k \in \mathbb{R}^n$ の凸結合という。

- X の点の凸結合で得られるすべての点の集合を X の凸包といい、 $\text{conv}(X)$ と書く。
- $\mathbf{x} \in X$ かつ $\mathbf{x} \notin \text{conv}(X \setminus \{\mathbf{x}\})$ となる点 \mathbf{x} は集合 X の端点

有界多面体

性質

- 集合 X が凸であるための必要十分条件は、 X の点のどの凸結合も X に含まれること.
- 集合 X の凸包は X を含む最小の凸集合.
- 凸集合 X_1, X_2, \dots, X_n に対して、 $\bigcap_{i=1}^n X_i$ は凸集合
- 半空間は凸集合なので、多面体は、凸集合である.

“有界多面体の有限基底定理”を証明する.

有界多面体 -有界多面体の有限基底定理- I

定理 (Minkowski (1896), Stenitz (1916), Weyl (1935))

集合 P が有界多面体であるための必要十分条件は, P がある有限集合の凸包であることである.

(Shrijver (1986)) の証明

$P = \{\mathbf{x} : A\mathbf{x} \leq \mathbf{b}\}$ を空でない有界多面体とし,

$$C = \left\{ \begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ \lambda \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{n+1} : \lambda \geq 0, A\mathbf{x} - \lambda\mathbf{b} \leq 0 \right\}$$

とする. 明らかに次を満たす.

$$P = \left\{ \mathbf{x} : \begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} \in C \right\}.$$

有界多面体 -有界多面体の有限基底定理- II

C は多面錐であり、有限個の非零ベクトルで生成できる。そこで、 $\begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ \lambda_1 \end{pmatrix}, \dots, \begin{pmatrix} \mathbf{x}_k \\ \lambda_k \end{pmatrix}$ を C を生成する有限個の非零ベクトルの極小なベクトル集合とする。 P は有界であるので、どの λ_i も非零となる。

$\because \lambda_1 = 0$ とすると、 $\begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ \lambda_1 \end{pmatrix}, \dots, \begin{pmatrix} \mathbf{x}_k \\ \lambda_k \end{pmatrix}$ の極小生より、 $\mathbf{x}_1 \neq \mathbf{0}$ であり、さらに、

$$\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} = \mu_1 \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ 0 \end{pmatrix} + \mu_2 \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ \lambda_2 \end{pmatrix} + \dots + \mu_k \begin{pmatrix} \mathbf{x}_k \\ \lambda_k \end{pmatrix}$$

かつ $\mu_1 > 0, \mu_2, \dots, \mu_k \geq 0$ となるような $\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} \in C$ が存在する。
 一方、任意の $\alpha > 0$ に対して、 $\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} + \alpha \mu_1 \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ 0 \end{pmatrix} \in C$ であり、
 $\mathbf{x} + \alpha \mu_1 \mathbf{x}_1 \in P$ となるが、 $\mathbf{x}_1 \neq \mathbf{0}$ であるので、これは、 P の有界性に反する。従って、 $\lambda_1 \neq 0$ である。

有界多面体 -有界多面体の有限基底定理- III

一般性を失うことなく、全ての λ_i が 1 であると仮定できる。従って、 $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k \in P$ である。さらに、 $\mathbf{x} \in P$ であることと、 $\mu_1, \dots, \mu_k \geq 0$ を用いて、

$$\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} = \mu_1 \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ 1 \end{pmatrix} + \dots + \mu_k \begin{pmatrix} \mathbf{x}_k \\ 1 \end{pmatrix}$$

と書けることは等価になる。すなわち、 $\mu_1 + \dots + \mu_k = 1$ となり、 P のどの点も $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ の凸結合で書け、 P は $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ の凸包となる。

逆に、 P が $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k \in \mathbb{R}^n$ の凸包であるとする。すると、 $\begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \mathbf{x}_2 \\ 1 \end{pmatrix}, \dots, \begin{pmatrix} \mathbf{x}_k \\ 1 \end{pmatrix}$ で生成される錐を C とおけば、 $\mathbf{x} \in P$ と $\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} \in C$ は等価になる。 C は多面的であり、従って、

$$C = \left\{ \begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ \lambda \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{n+1} : \lambda \geq 0, \mathbf{A}\mathbf{x} - \lambda\mathbf{b} \leq 0 \right\}$$

有界多面体 -有界多面体の有限基底定理- IV

と書ける. $\mathbf{x} \in P$ と $\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ 1 \end{pmatrix} \in C$ の等価性より,
 $P = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n : A\mathbf{x} - \mathbf{b} \leq \mathbf{0}\}$ となり, P は多面体になる. P の有界性は, 明らかである.

有界多面体

系

有界多面体は、その頂点全体の凸包である。

Proof.

P を有界多面体とする。有界多面体の有限基底定理より、 P の頂点の凸包は、多面体 Q になる。構成の仕方より、 $Q \subseteq P$ となる。ここで、 $\mathbf{z} \in P \setminus Q$ が存在したと仮定する。すると、 $\mathbf{c}^T \mathbf{z} > \max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in Q\}$ を満たすベクトル \mathbf{c} が存在する。一方、 P の支持超平面 $\{\mathbf{x} : \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \max\{\mathbf{c}^T \mathbf{y} : \mathbf{y} \in P\}\}$ は $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{y} : \mathbf{y} \in P\} \geq \mathbf{c}^T \mathbf{z} > \max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in Q\}$ より、 Q の点を含まない P の面を定義することになる。これは不可能である。 \square

有界多面体

台集合 E と部分集合 $X \subseteq E$ に対して, E に関する X の接続ベクトルとは, $e \in X$ ならば, $x_e = 1$, $e \in E \setminus X$ ならば, $x_e = 0$ として定義されるベクトル $\mathbf{x} \in \{0, 1\}^{|E|}$ である.

系

集合システム (E, \mathcal{F}) , \mathcal{F} の要素の接続ベクトル全体の凸包 P , 関数 $c: E \rightarrow \mathbb{R}$ に対して,

$$\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\} = \max\{c(X) : X \in \mathcal{F}\}$$

である.

\mathcal{F} は E の部分集合族である.

有界多面体 I

系

$$\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\} = \max\{c(X) : X \in \mathcal{F}\}$$

$$\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\} \geq \max\{c(X) : X \in \mathcal{F}\}$$

は自明であるので、逆の不等式を示す。 \mathbf{x}^* を $\max\{\mathbf{c}^T \mathbf{x} : \mathbf{x} \in P\}$ の最適解とする。 P の定義より、 \mathbf{x}^* は \mathcal{F} の要素のある接続ベクトル $\mathbf{y}_1, \dots, \mathbf{y}_k$ の凸結合で表せる。 すなわち、 $\sum_{i=1}^k \lambda_i = 1$ を満たす $\lambda_1, \dots, \lambda_k \geq 0$ を用いて、

$$\mathbf{x}^* = \sum_{i=1}^k \lambda_i \mathbf{y}_i$$

有界多面体 II

と書ける. $\mathbf{c}^T \mathbf{x}^* = \sum_{i=1}^k \lambda_i \mathbf{c} \mathbf{y}_i$ であるので, 少なくとも1つの i に対して, $\mathbf{c} \mathbf{y}_i \geq \mathbf{c}^T \mathbf{x}^*$ となる. この \mathbf{y}_i は $c(Y) = \mathbf{c} \mathbf{y}_i \geq \mathbf{c}^T \mathbf{x}^*$ を満たす集合 $Y \in \mathcal{F}$ の接続ベクトルである. すなわち $c(Y) \geq \mathbf{c}^T \mathbf{x}^*$ となり, 逆の不等式が得られる.

来週以降の注意

- 来週以降は村松先生がしばらく担当される。
 - 本日配布した資料を必ず持ってくる
 - スライドではなく、板書で講義するため、ノートを持参すること。
-
- 1 多面体の基礎 (担当：高橋, 12/7)
 - 2 弱理想グラフ定理 (2)：多面体的手法 (担当：村松, 12/14)
 - 3 楕円体法 (1)：基礎, アルゴリズム (担当：村松, 12/21)
 - 4 楕円体法 (2)：応用 (担当：高橋, 1/11)